「日本・オランダ現代美術交流展」「ブラジル現代日系作家展」

思い出された「生」に対する心の震え

美術

忙しさにかまけて忘れがちな大切なものを思い出させる二つの展覧会に出あった。どちらも「外国」が鏡になって、私たちの後ろ姿を映しているように見えた。

一つは「日本・オランダ現代美術交流展」。日本、オランダそれぞれ六人（組）が参加し、廃校となった東京の小学校校舎を会場とした変わった試みである。

コンピューターや機械、映像などを組み合わせて使用するテクノロジー・アートやパフォーマンスでの活動が目立つ作家たちで、無論、小杉美穂子＋安藤泰彦や、クリスチャン・ズワニッケンらハイテク、ローテクを使った作品が楽しめる。が、ここでは、「根の回復として用意された辺の環境」という副題を掲げているためか、フェリックス・ヘスら、シンプルな装置の作品に新鮮さを感じた。

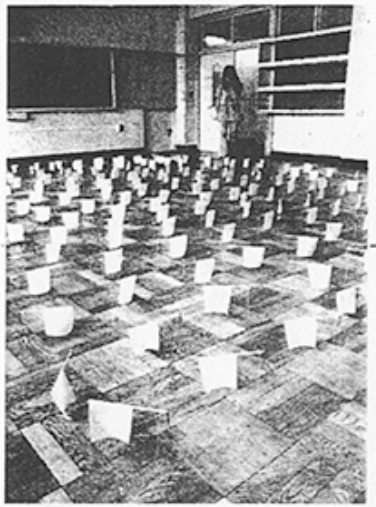
ヘスの「It's in the air」は、細い針金や木、和紙などで小さな白熱をつけた「やじろべえ」のようなものを三百数十個床に立てている。ちょっとした空気の動きに応じて旗は揺れ、ゆっくり回転する。鑑賞者が動けば、意外なほど旗が動く。生き物のようだ。自分の存在がこれほど周囲の空気を庄し、気の流れを生み出しているのか、と気づく。どこにでもあるなんでもない空間が、特別に意識されもする。

水嶋一江の、糸電話のようなものを音楽室に百数十本張り巡らせ、動きながらとすって音を出すパフォーマンスも単純だが、「発生期」の音楽がそこから立ちのぼってくる状態に出くわすことができる。どちらも、生（なま）の気、生の音を知覚する楽しさを思い出した。

もうひとつは「ブラジル現代日系作家展」。日本ブラジル修好百周年記念展。ブラジルの日系人三十六人と、ブラジル人五人の作品を集め、日本国内を巡回してきた。陶芸の鈴木章子を除いては、半立体を含め絵画ばかり。長辺が百二十㌢以内の作品という制約もあり、とても本当の力量は推し量れないが、第二次大戦前に移民した笹田知雄、大竹富江、間部学らの長老やリーダーから、戦後渡伯した若林和夫、豊田豊らを経て、一九六五年生まれの大岩オスカール部男ら二、三世までのおおよその傾向は知ることができる。

高齢の世代はともかく「うまい」とは言えない。若い世代も、「古い」「新しい」という分類をすれば、必ずしも「新しい」とは言えないだろう。しかし、それは、日本と美術の流れの文脈が違うだけのことで、それぞれ工夫のマチエール（画肌）を獲得している。なによりも、聞き直って自分探しをしている姿勢が感じられるところが魅力だ。画面には「生」の作画動機が定着した強さが宿る。

日本では、次にはやりそうなスタイルを探るだけで、作者の心の震えが感じられない作品に出あうことがしょっちゅうだ。作者と作品の「生」の距離感の貴重さを、ふと思い出したのである。（編集委員・田中三蔵）



フェリックス・ヘス「It's in the air」（1996年）＝東京・旧赤坂小学校で

――「日本・オランダ現代美術交流展」は23日まで、東京都港区赤坂4丁目、旧赤坂小学校。「ブラジル現代日系作家展」は、30日まで、同区六本木4丁目、麻布美術工芸館。月曜休み。

朝日新聞　1996年6月20日(木) 夕刊